

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤優 （聞き手・小峯隆生）

第一回

佐藤優さんは、次のように語る。

「3月11日の震災と大津波、福島原発事故で、日本の戦後体制は完全に崩壊しました。きちんと勉強して、受験でいい点を取り、いい大学を出たエリートが、まったく、役に立たないということを示したのです」

つまり、本を読んだり、インターネットで検索したりしただけで、「あっ、それ読んだ。それ、知っている」だけでは、まったく、役に立たないという事実が明確になったのである。

これからは、新しい世界観を持つことが、必要。

政治は相変わらず混迷を続けている状態。

安心といわれていた年金制度の崩壊、人口減少に超高齢化など。これまでの日本人が経験していないことだらけの時代がもうやってきている。個人が、自分自身で何とかしなければならぬのだ。

その場その場を^{しの}凌いでいく「ノウハウ」のようなものも確かに必要だろう。しかし、「想定外」の事態に直面したときには、そんな小手先のテクニックは役に立たない。そのような事態に直面しても、ぶれず、解決できる個人となるためには、大きな幹＝新しい世界観が必要だ。その幹を^{はぐく}^{ひよく}育む肥沃な大地をつくるのが「哲学」である。

——外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称したワークショップを不定期でおこなっている。佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、そこで話されたことを編集したのが、この実践講座。新しい世界観を身に着けるべく、ともに学んでいこう。

*

*

*

——佐藤さん、これからの時代には我々は、何が必要なんですか？

佐藤 「哲学」を学ぶ必要があります。欧米の知的エリート、政府の中枢に携わる人々は、すべて、その訓練を受けています。

——いわば「哲学的訓練」ですか。では、その哲学的訓練に入る前に、まず、これからの時代に必要な学問＝実学とはいかなるものか、何か事例を挙げてご説明いただけませんかでしょうか？

橋下大阪市長とマッカーシー

佐藤 大阪市長の橋下徹^{はしもととおる}氏。彼は今までのゲームのルールでは計れないことを次々に打ち出してきました。

テレビ・新聞のニュースなどを見ますと、コメンテーターとか、識者と呼ばれる人たちを見事なまでに論破しています。

——やっていたね、コメンテーターの皆様を、完璧^{かんぺき}論破。

佐藤 視聴者から見れば、橋下さんの勝ち、という印象でしょ？

——圧倒的な勝利ですね。頭のいい人たちがコテンパンですからね。見ていて、気持ちいいですよ。

佐藤 そのやられたうちの一人、政治学者の山口二郎さんは、私の親しい友人です。

私は彼に言いました。「橋下徹現象、あの反ファシズム論には勝てないよ。あれはね、ファシズムじゃないからだ」と。

——えっ、「橋ズム」と擲^ち擧^げされるほど、ファシズムなんじゃないんですか？

佐藤 ファシズムは、内側に対しては優しくして、国民を束ねていく。逆に、その外側にいる人は嫌だろけどね。

ところが、橋下さんには内側に対する優しさが無い。

それから、バラバラにアトム化された人間を束ねていくという発想もない。ここでアトムの世界観について説明しておきます。アトムとは、原子と訳されますが、ギリシャ古典哲学では、これ以上分割することができない基礎単位を指します。個人から社会ができていくという考え方は、アトムの世界観に基づくものです。

橋下さんには、アトム化した個人を束ねていくという発想が希薄です。だから、ファシ

ズムではありません。

むしろこれは、アメリカのマッカーシズムのアナロジー（類似）と見るべきだと。

私がそう言うと、「それは確かにいいポイントをついている」と言っていました。

——1950年代、米国ハリウッドの映画業界も巻き込んだ、赤狩りの「マッカーシー旋風」ですか！

佐藤 そうです。彼は紙を頭上に高々と、振りかざすんですよ。

「私の手元には、アメリカの国務省にいる共産党の黨員リストがある」

その数を多くと言ったのか、具体的な人数を言ったのかよくわかりませんが、ただ一つ、言えることは、そのリスト、実は存在しなかった。

——えっ!?

佐藤 ハッターリだったんです。しかし、アメリカ中、「これは大変だ！」とパニックになりました。このときから、マッカーシーは当時のアメリカ政治に欠かせないプレイヤーになりました。その後の彼の活動に注目してみます。

彼は、出会った相手に対して「お前は共産主義の手先だ」とまずぶつける。そして、徹底的に相手を叩き潰します。しかし、ポンと肩を叩いて言う。

「そんな、怒るなよ。言い過ぎたよ。まー、飲めよ」

——^{けな}貶しといて、あとからフォローですか？

佐藤 そうです。

マスコミの記者たちに対してはこうです。

「お前を徹底的に潰してやる」

と攻撃してくる記者からも逃げることなく、

「まー、飲めよ、水割り？ ソーダ割り？ 僕は、悪く書かれてもいいからさ」

と言って徹底的に付き合う。

マスコミの記者たちも「あれ、マッカーシーって過激な論をぶつだけかと思ったら、意外といいやつじゃん」とだんだん、味方が増えてくる。

——2010年代の日本にもありそうなお話ですな……。

佐藤 マッカーシーは、共和党議員です。なのに、民主党議員すら逆らわない。さらに、国務省、C I Aとかからも協力者がどんどん出てくる。やがて絶大な権力を持つようになります。

——しかし、独裁者にはならなかった？

佐藤 ならないんです。映画で『独裁者』を演じたチャップリンを赤だとして、赤狩りの対象としたことはあったようですが。

『市民カーン』というアメリカの TV 映画作品があります。（『市民ケーン』とは違うものです・編集部注）

これは、マッカーシーと組んでいた弁護士物語です。日本語版はありませんが、アメリカの Amazon で買えます。これを観ると凄く参考になります。

マッカーシーはアイルランド系。当時アメリカでは、アイルランド系の人々は差別されていました。苦勞して弁護士試験に通り、その後、判事になりました。

そして、地方の政界に進出。常に敵をつくり出し、その敵に対抗する味方も自分でつくり出し、その敵と戦うというスタイルで権力をつけ、やがて、上院まで上っていく。市民に敵は誰なのかをまずはっきり示し、自身の意見の賛同者を味方にし、権力の中核へと上りつめていく。

先ほどお話しした大阪市長の形態とよく似ていませんか？

——似てますね。マッカーシーの登場でアメリカの何が変わったんですか？

佐藤 マッカーシーが活動したのは、実質 4 年です。その間にアメリカの国家の在り方が変わってしまいました。

アメリカはナチスと戦った反ファシズムでリベラルな国だった。ところが、反共的で非常に硬直した発想の、イデオロギーの強い国になってしまった。

それまでのアメリカはモンロー主義で、自国以外の世界には首を突っ込まなかった。しかし、それが、世界の憲兵の役を果たし、全世界にアメリカの基準を押しつけるようになった。その結果、ベトナム戦争に突入し、泥沼から抜け出せなくなってしまった。

また、アジア外交でも、イギリスは毛沢東^{もうたくとう}政権を承認しましたが、アメリカは最後まで台湾にこだわりました。アメリカも当初、毛沢東政権を承認しようとしたのですが、マッカーシーの力によって、それができませんでした。

しかし、今日^{こんにち}の世界勢力図にも影響を残したマッカーシーは、最初は普通の人間だったらしいのです。

そんな彼が、先ほどお話しした 1950 年 2 月 9 日、ウェストバージニア州のホイーリングで演説をし、その演説の中で、国務省には共産主義者がうようよしており、自分も国務長官も、その名前を知っていると言いつつ放った。

後日、マッカーシーは共産主義者が 205 人と言ったが、71 人、57 人、それとも多数、と言ったかということで、若干^{じやつかん}の論争がありましたが、数なんて問題ではありません。国務長官にも知られている共産主義者が国に勤務し、国の政策を立てている。この驚くべき発言を調査するために、上院委員会が設けられた――。

マッカーシー。彼はそもそもどんな人物なのか？

マッカーシーにはやりたいことがないんです。主義も原理も無い。シニカルに笑い飛ばしているニヒリストです。

個別の局面で自分が目立ち、自分のことを^{おび}怯えている人がいて、その一方で自分を崇拜している人がいる。それらを見ていて楽しいのでしょうか。

ビジョンなき革命家で、理由なき反逆者です。

革命はマラパルテの原則に従え

——なんでアメリカ人たちは、当時、あんなに熱狂的にマッカーシーを支持し、^{だま}騙された格好になったのですか？ 共産主義怖い、その一点だけですか？

佐藤 当時、第二次世界大戦後で、アメリカは景気も悪くなって、^{へいそくかん}閉塞感が国中を覆っていました。

——その閉塞状況が、マッカーシーを求めたんですか？

佐藤 そう。世の中に閉塞感が蔓延^{まんえん}すると、それを打破するためには、マッカーシーのよう
な人が必要です。

文化人類学でいうところの、トリックスターです。

——トリックスターが、国家権力を掌握できるんですか？

佐藤 権力を取る。それには当然、取り方があるんですよ。

——選挙で勝って、議会で過半数取れば、いいんですよね？

佐藤 マラパルテの原則を使います。

——なんですか、それ？

佐藤 イタリアの有名な政治学者で作家で陰謀家です。

最初は共産主義者で、後にファシスト。イタリアのファッショ革命の初期には、その中心にいた。

『クーデターの技術』という本を書いています。

—そもそも簡単にクーデターって、できるんですか？

佐藤 これは、権力奪取の教科書です。今でも、合法、非合法を問わず権力奪取をする時は、マラパルテの原則通りに、動いています。

—どんな原則なんですか？

佐藤 大衆運動とか、議会で多数を占めるということじゃなくて、ピンポイントで何人かの専門家たちをちゃんと掴^{つか}んで、ネットワークを作れば、権力は簡単に取れる、という法則です。

—そんな簡単に権力が……。

佐藤 橋下さんはこのやり方をすれば、革命が起こせるかもしれませんよ。

—もう読んで、活動しているんじゃないですか？

佐藤 どうでしょう。書物から何かを学ぶということを重視していない人のように思える

ので……。

その『クーデターの技術』中に、「近代のクーデターの定義は、ひとえに組織された反乱技術によって決せられる」という記述があります。

この「組織された反乱技術」。これが、キーワードです。

『クーデターの技術』の中で取り上げられているトロツキー（1917年ロシア十月革命の指導者の一人）は、こう述べています。「反乱は一つの機械のようなものだ。機械を作動させるには専門家が必要であると同様に、反乱を起こすにも、専門家が必要なのだ。そしてまた、反乱を喰い止めることができる者は、やはりこの専門家だけなのだ。反乱という機械

が回転するか否^{いな}かは、一国の政治的・社会的・経済的な条件によっては決せられない」と。

ここでの専門家というのが、日本に置き換えるなら、官僚なんですよ。

その官僚の中の不満分子、または、官僚機構から追い出された者……。

——あつ、いらっしゃいますね、そんな方々。今、目の前にも……。

佐藤 ハイ(笑)

そんな人たちにかかれば、国家機能は、このボタンを押せば動き、あれをすれば機能がストップすることは自明の理です。どうやれば、いいか、革命を起こしたい人物に、丁寧に、彼らがアドバイスする。

そんな人物が複数、革命を起こそうとする者とともに動けば、どうなるでしょうか？

——革命、起こせちゃいますね。

佐藤 だから、橋下氏が、古賀茂明氏（^{こがしげあき}経済産業省にて、国家公務員制度改革推進本部事務局審議官などを歴任）を大阪市統合本部特別顧問として自分の陣営に入れたことの意味は、非常に大きい。

『クーデターの技術』と同じように思いませんか？ 『クーデターの技術』を知らず知らずのうちになぞっているわけです。これから、何が起きるか、非常に興味深いです。

——橋下さんは、今後、どうなるんですか？

佐藤 マッカーシーは、なぜ、終わったのか。その結末から推測できます。

地方では、マッカーシーのようなデマゴグ（意図的に^{きよぎ}虚偽の情報を流し、人々を扇動する）は有効です。

なぜでしょうか？ わかりますか？

——……田舎だから……ですか？

佐藤 そうです。苦し紛れ^{まぎ}だったわりには、本質を衝^ついている答えです。

田舎には、外交・安全保障が存在しません。

——おらが故郷の話と、国とは違うというわけですね。

佐藤 そうです。外交・安全保障となると、外国との関係があるから、自分たちだけでプレイヤーの調整ができなくなる。

外国相手にポピュリズム(自国の国民の利益が政治に反映されるべきとする政治の立場。大衆迎合^{げいごう}主義)をやると、状況によっては戦争になってしまいます。

だから、マッカーシーが共産主義という「カード」を国内で使っているうちはよかったです。

しかし、核兵器を持っているソ連(当時)相手にやり始めると、マッカーシー自体が国家にとって、危険な存在となってしまいます。

結果、マッカーシーは危険ということで排除されてしまいました。

——すると、橋下氏は、大阪ローカルの国内戦はずっと勝てるけど、国家レベルになると、ちよいと難しい？

佐藤 そうなんです。だからね、橋下さんの運命は3つ。

シナリオ①、今の調子ですっと続けて、外交・安全保障問題で、大変な虎の尾を踏んで、潰される。

シナリオ②、国政レベルの長、つまり首相になった時、現実主義的な政治家になる。彼は弁護士だから、それができる。しかし、結果丸くなるというか、つまらない政治家となって、これまでのポピュリズムにより構築してきた権力基盤を喪失して倒れる。

シナリオ③、橋下氏が新しい国民の物語を構築し、ムッソリーニかスターリンのような指導者になる。

このいずれかでしょう。

——実学を身につければ、このような先の予測も立てることができるのですね。

〈つづく〉

今月の内容をより深く学ぶための本

『マッカーシズム』 R. H. ロービア著／宮地健次郎訳 岩波書店（岩波文庫）

『クーデターの技術』 C・マラパルテ著／矢野 秀 訳 イザラ書房